
仮面ライダーディケイド・ミラクル

あにい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド・ミラクル

【Nコード】

N1806I

【作者名】

あにい

【あらすじ】

世界を巡る旅を終えた士達・・・

しかし、再び夏海の世界に異世界の怪物が現れたとき士の新たな旅が始まる

キャラ紹介

門矢士

この物語の主人公。

前回の旅の中で、仲間と共に世界を巡り平和を築いてきた。そして、また世界の運命によりディケイドの力を持ち旅へと出ることになる。

光夏海

【夏海の世界】の住人。

前回の旅にも同行しており、一応士の心の支えになっていた。今回も旅に参加しようとしていたが、士に拒否されてしまう。

光栄一郎

【夏海の世界】の住人で夏海の祖父。

光写真館を営んでおり、写真館を訪れる人に美味しいコーヒーを差し入れる。

前回の旅では写真館ごと世界を移動していたので、もっぱら留守番していて士や夏海の帰る場所を守っていた。

キバーラ

【キバの世界】の住人。

ワタルのパートナーであるキバットバット三世の妹。

士に新たな旅を促した人物で、今回の士の旅のパートナー。

第1話：新たなる旅の始まり（1）

ここは、とある世界のとある街。

外の世界の住人からみれば、ここは【夏海の世界】と呼ばれる世界。

その世界の中にある、古っばい建物。

その建物の壁には、【光写真館】の文字があつた。

「大分良い写真が撮れるようになりましたね、土君。でも、まだ完壁じゃないですけど」

「撮れてるならいいだろ？夏海。苦情も減っているんだ。ここもこれから安泰だろうな」

そういう土と呼ばれた人物。

「確かに土君のカメラの腕が上がってきたのは良いことだよね」

そついいながら、土と夏海の話に入ってきたのは夏海の祖父・光栄次郎だった。

「でも、あれから随分経ちますよね・・・旅の終わりから」

そつ言い窓の外の景色を見る夏海。

「色々あつたが・・・無事帰ってこれたのはよかったな」

そう言う士。

「それに士君の世界も・・・ここって事なんですから」

「どうだろうな・・・もう世界を巡る事もないだろうが・・・まだ知らない世界が俺の本当の世界なのかもしれないしな」

そう呟く士。

「でも、旅をしていた時も楽しかったよね。また、今度は騒動でじやなくてゆっくりと世界を回りたいね」

そう告げる栄次郎。

と、その時

「そう言うことならしてあげてもいいわよ」

そんな声が、写真館の中で聞こえてきたのだった。

「今の声って・・・まさか」

そして、士達の前に現れた小さな白いコウモリ。

「久しぶりねデイケイド・・・って、今は士だったわね」

「キバーラ・・・何でお前がここに」

驚く士。

だが、それ以上に夏海や栄次郎も驚いていた。

「キバーラちゃん、また来てくれたんだね」

何やら嬉しそうな栄次郎。

「って、久しぶりに会えたのはいいんですけど、一体どうしてこの世界に……」

尋ねる夏海。

「それはもちろん……また、世界を巡る旅が始まるからよ」

士達に静かにそう告げたキバーラなのであった。

第1話：新たなる旅の始まり（2）

「世界を巡る旅・・・どういうことですか」

尋ねる夏海。

「私も詳しいことは知らないわ。ただ、私の所にこれが届いたのよ」と、キバーラは何処から取り出したのか一つの腕輪を土に渡した。

「ただの腕輪・・・じゃないな」

そう告げる土。

「それが私が夏海の世界に来れた理由よ」

そう言うキバーラ。

「もしかしてそれが世界を巡るためのアイテムなのかい？」

そう聞く栄次郎。

「そう言うことよ。ちなみに私の身体にも私サイズのそれがついてるわよ」

そんなことをアピールするキバーラ。

「つまりこいつで世界を旅して、また世界を救うってことか」

「ちょっと待ってください。一人でいくつもりですか土君」

そう言う夏海。

「仕方ないのよね。そのリングがあるのは私のとあとそれだけなのよ」

そう言うキバーラ。

「まあ、丁度いいな。ナツミカンは自分の世界でゆっくりしている」

そう告げた土。

「そんな・・・」

「だいたい、今回は写真館が世界を移動する場所じゃないんだ。一緒に行くのが無理な話だろ・・・だいたいそんなにキバーラがリングを持ってこれる分けないしな」

そう言う土。

「私も誰がこのリングを送ってきたのかはわからないけどね」

そう言うキバーラ。

だが、その時突然外から爆発する音が聞こえてきた。

「今は・・・」

慌てて窓から外を覗き込む栄次郎。

「おじいちゃん。外で何が・・・」

「みたことのないものが暴れているようだよ」

「とりあえず見に行ってみるか」

それだけ告げると表へ飛び出していった土。

「土君！」

「私も付き合うわよ」

そう言つて土の後を追つたキバーラ。

「土君は世界を旅している時の方が生き生きしているようだね」

そう言う栄次郎。

「だからといって一人で世界を巡る旅なんて・・・大体・・・」

納得が出来ない様子の夏海。

「おや・・・」

と、栄次郎が何かに気づき声を上げた。

「おじいちゃん？」

「土君、ディケイドライバーを忘れていつているね」

栄次郎に言われて夏海が確認すると、テーブルの上にディケイドライバーとライドブッカーが置かれていた。

「旅が終わって使わなくなったから、ずっとここに置いていた・・・」

「確かケータツチはネガの世界とやらの住人に返したんだっけね」

そう言う栄次郎。

「・・・土君もこれがなければ世界を巡る旅には出れませんよね・・・」

そんな事を考える夏海。

そして、栄次郎はそんな夏海を見て何かを思うのであった。

第1話：新たなる旅の始まり（3）

「確かにそれがなければ土君は他の世界にいつても何も出来ないだろうね・・・でも、それは土君の旅の邪魔をしてしまうことになる。夏海はそれでいいのかい」

そう聞いてきた栄次郎。

「私は・・・私だって一緒にまた旅に行きたかっただけ・・・」

「今回は全てを土君に任せてみようじゃないか。この世界も、他の世界の運命も」

「おじいちゃん・・・」

ディケイドライバーを眺める夏海。

その頃、土は生身の身体で謎の怪物と戦っていた。

「って、何でディケイドライバーもって外に出てこないわけ」

そう言うキバーラ。

「旅じゃいつも持ち歩いていたら・・・その感覚で・・・」

ある程度の動きは出来るものの、まともな攻撃が出来ない土なのでどちらが有利かははっきりとわかっていた。

「今、取りに戻ったらナツミカン達に危険が・・・」

そう言う士。

「士君!!」

と、そんな声に振り向くと写真館の入り口の前に立っていた夏海。

「お前・・・」

「いいですか！絶対に・・・絶対に無事でいてください！約束です」

「・・・当然だ」

それだけ告げた士。

と、突然投げ渡されたディケイドライバーとライドブッカーをキヤツチした士。

「・・・」

無言で士を見ている夏海。

「さあ、ここからが本気だな」

腰にディケイドライバーをセットする士。

そして、ライドブッカーから一枚のカードを取り出すと、ディケイドライバーにそのカードを差し込んだ。

「久しぶりの、変身！」

【カメンライド・ディケイド】

その音声と共に土は、仮面ライダーディケイドへと変身したのだった。

「悪いが即行で終わらせる」

と、ディケイドはライドブッカーから別のカードを取り出すとセツトした。

【ファイナルアタックライド・ディ、ディ、ディ、ディケイド】

その音声と共に、ディケイドの前にエネルギー状のディケイドのシンボルマークが入ったカードが複数枚出現した。

そして、ディケイドが跳び上がるとそれに連動してカードも斜め上に移動した。

そして、怪物めがけてカードの中を突き抜けてキックを放つディケイド。

その攻撃を阻止しようとした怪物だったが、結局何も出来ずディケイドのライダーキックをくらい爆発と共に消滅した。

「楽勝だな」

そう言うとディケイドは変身を解除した。

「土君・・・」

「心配するな・・・世界を平和にしたら戻ってくる。とりあえずはここが俺の世界みたいだしな」

と、土がいつの間にか身につけていた世界を渡るリングが光り始めた。

「こつちもオツケーよ。それじゃ最初の世界へ・・・」

そして、光に包まれていく土とキバーラ。

「土君！」

ほぼ無意識に手を伸ばしていた夏海。

だが、その先にはすでに土の姿はなく夏海の手は空をきるだけなのであった。

第2話：見知らぬ世界（1）

しばらく空間を飛んでいた土とキバーラ。

そして、気づいたときには見知らぬ町の中に立っていた土。

「到着する前触れとか無しか・・・この世界の住人がいる前でいきなり現れたらどうなるんだ」

そう呟く土。

「とりあえず別の世界に到着したわよ。で、これからどうする？」

そう聞いてきたキバーラ。

「この世界がどんな世界か知る必要がある。見た目は夏海の世界と同じ感じだが・・・手分けして調べるか？」

「土がそうするならいいわよ。それじゃ」

と、早くも飛び去ってしまったキバーラ。

「さてと、俺も行くか」

そう告げると町中を歩き始めた土。

と、かなり離れた場所から土のいる場所目指して宙を飛んでいる人物がいた。

「反応があつた場所はもうしばらく先ね」

と、その人物は何かに気づいて動きを止めた。

「ザフィーラ！」

と、大地から跳び上がり屋根の上にのぼった獣。

「俺がサポートにはいる。シグナムもヴィータも別件で忙しいから・・・シャル」

そう告げたザフィーラと呼ばれた獣。

「でも、気をつけてザフィーラ。管理局の罠かもしれない・・・」

シャルがそう言うと

「承知している。では、先に行くぞ」

と、駆けだしていったザフィーラ。

「私は辺りの警戒をしながら・・・」

そう言いながらシャルも移動を再開するのだった。

「・・・」

歩きながら土は何かに気付いていた。

そして、その足は町の中心部ではなく町外れに向かっていた。

「とりあえず出てきたらどうだ？」

前を向いたままそう告げた士。

「いつから気付いていた？」

そう言いながら木の上から降りてきたザフィーラ。

「わざとかしらないがわかるように気配を出してただろ」

士がそう言つと

「お前に恨みなどはないが主のための力になつてもらふ」

と、ザフィーラは獣の姿から獣人の姿に変化した。

「この世界が一体何の世界か知リたかつたしな・・・お前から聞くとするか」

そう決めると士はディケイドライバーを装備し、ディケイドのカードをセットした。

「変身！！」

【カメンライド・ディケイド】

そして、仮面ライダーディケイドとなった士はザフィーラに向かっていったのだつた。

第2話：見知らぬ世界（2）

ぶつかり合うディケイドとザフィーラの拳と拳。

「なかなかの力だな・・・だが！」

と、もう片方の拳をディケイドの身体にヒットさせたザフィーラ。

「早い・・・」

そして、そのまま連続で拳を炸裂させディケイドを弾き飛ばした。

「今は人の姿してやがるが、攻撃は獣みたいに鋭いな」

そう言うディケイド。

「これでとどめだ」

と、ザフィーラの前に魔法陣が出現した。

「!？」

と、地面から複数のエネルギー上のトゲが出現すると同時にその場から飛び退いたディケイド。

「近接戦闘だけが攻撃方法ってわけじゃないみたいだな」

「お前が何者かは知らないが主のために・・・」

「俺としてはこの世界がどんな世界か知りたいんだけどな・・・そのためにはこの戦いを終わらせないとな」

と、ディケイドはライドブッカーから新たなカードを一枚取り出した。

「おもしろいものを見せてやるよ」

そう言いディケイドライバーにカードを入れるディケイド。

【フォームライド・電王Ⅱアックス】

その音声の後に、ディケイドは仮面ライダー電王アックスフォームに変身した。

「姿が変わった・・・」

驚いているザフィーラ。

「さあ、かかってきな」

その言葉と同時に再び接近戦を仕掛けてきたザフィーラ。

先ほどはザフィーラの攻撃に押されていたディケイドだったが、電王アックスフォームになっているディケイドには通じてはいなかった。

「姿だけではないその能力も全く別のものに・・・」

「それじゃ今度はこっちの反撃だな・・・」

と、ザフィーラに対して武器である斧を構えるD電王。

だが、その時離れた場所で周囲を警戒していたシャマルが何かに気付きザフィーラ達の元に降りたつた。

「シャマル、まだ戦いは・・・」

「近付いてきているわ。きつとあの二人・・・シグナムもヴィータちゃんも近くにいない今の状況で接触するのは・・・」

そう言うシャマル。

「おい、何なんだ。まだ戦いは終わってないぜ」

そう言うD電王。

「貴方はこの世界のことを知りたいのですか？」

と、そう聞いてきたシャマル。

「そうだな・・・自分の役目であるからな・・・」

そう答えるD電王。

「貴方が私達と敵対しないと約束してくださるのなら、こちらも情報を提供します・・・今の状況、あまり時間ありません。早急に答えを・・・」

そう言うシャマル。

「・・・いいぜ。別に俺も無理に戦いたくはないしな」

と、変身を解き土へと戻った。

「良いのか？まだ奴は・・・」

そう言うザフィーラだったが

「シグナム達には後で私から話をしておきます。では、行きましよう」

そして、土はザフィーラとシャマルに案内されるままこの場から立ち去っていくのだった。

そして、土達がいなくなつて数分後・・・その場に二人の少女が降り立っていた。

「確かこのあたりだったよね・・・フェイトちゃん」

「うん、反応の地点はここで間違いないはずだよなのは」

そう言うフェイト。

「とりあえず一度戻ろう。クロノ君達にも報告しないといけないし」

そんな訳で早々にこの場を離れるのはとフェイト。

その頃、土はシャマル達の案内でとある家の前までやってきていたのだった。

第3話：主と守護騎士（1）

「ここがお前達の家か？」

そう尋ねる士。

「今は我々も住んではいるが、本来は主の家だ」

そう答えるザフィーラ。

「主・・・お前達は誰かに仕えているのか・・・」

「とにかく中へどうぞ・・・」

士を家の中に招くシャマル。

「おー、帰ったのかシャマ・・・って、誰だ」

と、家の中から現れた一人の少女が士を睨みつけながら言った。

「大丈夫よヴィータちゃん。それと、シグナムにも声をかけて集ま
つてもらえるかしら」

そんなわけで、一つの部屋に集まるメンバー。

「客人か・・・見慣れない奴だな・・・管理局の連中じゃないのか
？」

そう聞いてきたシグナム。

「それは問題ないわ。それとシグナム、はやてちゃんは・・・」

シャルが聞くと

「今は自室でお休み中だ・・・昨日遅くまで熱心に読書をしておられたようなのでな」

そう告げるシグナム。

「とりあえずこいつのことを説明しろよ。大体こいつってシャル達を確認しにいった反応の所にいた奴なんだろ」

そう言うヴィータ。

「やれやれ忙しいことだな・・・まあ、信じてもらえるかはわからないが話してやるから聞いてろ」

そう言う士。

「何だと偉そうに」

今にも土に飛びかかりそうなヴィータ。

「落ち着けヴィータ。シャルとザフィーラが問題ないと連れてきた奴だ・・・それにこちらの行動上・・・良い都合になるかもしれない」

そう言うシグナム。

そして、土は自分のことをシグナム達に話していった。

「別世界の住人か・・・なるほどな・・・突然感じられたのはそう言うことだからか・・・しかし、お前一人で来たのか？」

「一匹白いコウモリと一緒に・・・まあ、あいつは無害だから問題ない」

そう告げる土。

「今度はこちらの番ですね・・・貴方を信じはやてちゃんのためにも話します」

「って、そんな約束してたのかよシャル」

そう言うヴィータ。

「シャルの考えはおそらく・・・」

そう呟くザフィーラ。

そして、シャルは土にはやてと自分達のことを話していくのだった。

第3話：主と守護騎士（2）

「なるほど大体わかった・・・その本を完成させて主のはやてって奴を助けたいわけだ」

そう告げる士。

「まあ、それを阻止・・・しようとしている連中もいるが・・・」

そう告げるシグナム。

「そこで士さんをお願いが・・・私達はこの【闇の書】の完成のために世界を飛び回っているのですが・・・私達全員がここを空けてしまふとはやてちゃんが困ってしまいますし、寂しがらせたくありません」

そう言うシャマル。

「つまり俺はお前達の代わりに主を見守れと・・・そういうわけか」

そう告げる士。

「本当なら見ず知らずのお前なんか頼みたくねえんだけどな、大体まだ怪しいと思ってるし」

そう告げるヴィータ。

「心配するなヴィータ。もしもの時は私が責任を持って斬る」

真剣な顔でそう告げるシグナム。

「斬られるのはゴメンだな。俺としてはこの世界でしばらく滞在できる場所が確保できただけでもありがたい。この世界にいる間は主を守ってやる」

「主な動きは私から教えておきますから、シグナム達はこれからの事に備えていてください」

そう言うシヤマル。

「では、私とヴィータはリンカーコアの方を集めてくるとしよう」

「ザフィーラ、しっかりそいつのこと見てろよ」

そう言い残し飛び立つヴィータ。

「あいつは見た目そのままの子供だな」

そう呟く士。

「ん、誰かお客さん来てるんか？」

と、声が聞こえハツとするシヤマル。

「はやてちゃん起きたみたいですね。すぐ行きます」

と、あわててはやての自室に向かうシヤマル。

「お前が俺と戦った時に使った力、あれが異世界に存在する力なの

か？」

周りに誰もいなくなったからなのか、そんな事を聞いてきたザフィーラ。

「そう言うことだ・・・」

それだけ答える士。

と、ここでシャルマルに抱えられてはやてが士とザフィーラの前に姿を現したのであった。

「あの子か・・・」

はやてをよく見る士。

「あの人がお客さんやな。と、シャルマルもうええよ。車椅子で大丈夫や」

と、車椅子に座り士に近づくはやて。

「初めまして。うちは八神はやて言います」

そう自己紹介したはやて。

「俺は門矢士。今日から世話係をするらしい」

そう告げる士。

「？、シャルマル達どこか行ってしまうん？」

ちょっと不安そうな表情で尋ねるはやて。

「ちょっと今の仕事が大変で、家を空けることが多くなりそうなので・・・彼が協力をして頂けると言っことで・・・」

とりあえず説明をしていくシャマル。

「なんやいきなりそうなってしもって・・・困ってないんか？」

「それは大丈夫です。土さんもこの町に来たばかりで住む場所を探していたらしくて、ここで住み込みという形なので」

「そうなんか。せやったらここを自分の家やと思つてゆっくりしててええよ」

笑顔でそう言うはやて。

「まあ、ほどほどにゆっくりさせてもらう。一応はお前・・・はやての世話があるからな」

「シャマル、土さんと色々話したいんやけど・・・」

「その前にはやてちゃんにご飯を食べて少しでも元気にならないと」

そんな訳で、土の八神家での生活がここから始まっていくのである。

第4話：土とはやて（1）

そんなこんなで始まっていく土のこの世界での日常。

初日こそシャマル達の説明を受けながらのはやて達との生活。

そして翌日・・・。

「すみません土さん。まだ二日目で説明が不十分な所もあるのに・・・私もザフィーラも」

そう言うシャマル。

「俺なら問題ない。大体分かってるからな。それにシャマル達は主を助けるためにやってるんだろ。なら、早く行け」

そう告げる土。

「はやてちゃんの事お願いしますね」

そう言い残し慌てて表に出て行ったシャマル。

「守護獣としては常に主を守らねばならないが・・・」

と、土の後ろからザフィーラがそう告げた。

「その話ならシャマルから聞いた・・・はやてのためにを思っなら行け」

そしてザフィーラも出発し、静けさを取り戻す八神家。

「そう言えば主様は今朝食中だったな・・・戻るか」

「シャマルとザフィーラ行ってもうたんか・・・せっかちさんやな」
そう言うはやて。

すではやては朝食を終えていた。

「後片付けはやっておく。はやてはゆっくりしていればいい・・・」

はやてを氣遣つてか、そう言う発言をする士。

「そんなのあかん。やるなら一緒にや」

笑顔でそう言うはやて。

「まあ、別にいいが無理はするなよ。はやてに何かあったらあいつ等がうるさいからな」

そんな訳ではやての手伝い(?)を受けながら、後片付けを終わらせた士。

「一応はやてが行きたいところがあったら連れて行ってやれってシグナムに言われたが・・・」

そう告げる士。

「今日はシャマルもおらんしな。ほな、わがまま言ってええか？」

ちよつと土の様子を伺いつつ聞くはやて。

「遠慮はするな。俺はシャル達の代わりでここにいるんだからな」

「そうか？せやったら・・・」

それからしばらくして、はやては車椅子に乗り土と共に図書館へとやってきた。

「ここが一番お気に入りの場所なのか？」

尋ねる土。

「ここでの友達が出来てな、それから時々な」

嬉しそうにその時の事を語るはやて。

「こついつ時じゃないと本は読まない・・・」

「土さんも好きな本探してええよ。しばらくはウチも本読んでるし」

とりあえず土とはやては館内に入り、本を探すことになった。

「あつ、はやてちゃん」

呼ばれて声がした方をみると、はやてと同年ぐらいの女の子が本を手に持ち立っていた。

「すずかちゃん！今日は会えたな」

互いに笑顔で言葉を交わすはやてとすずか。

「それでそちらの方は・・・初めてお会いになりますね」

士を見てそう言うすずか。

「シャル達が忙しいみたいでな、それでシャル達の代わりにウチの面倒を見てくれることになった士さんなんよ」

そうすずかに士を紹介するはやて。

「まあ、そう言うことだ」

そしてすずかに対してそれだけ告げる士なのであった。

第4話・土とはやて(2)

はやてがすずかと楽しく時を過ごしている間、土も静かに本を読んでいた。

それからしばらくして

「お待たせしました」

すずかがそう言って、はやての車椅子を押しながら土の元に戻ってきた。

「楽しめたか？」

はやてにそう聞く土。

「もちろんや」

そう答えるはやて。

「それじゃはやてちゃん。また会えたら」

「またな、すずかちゃん」

そう言いすずかと別れるはやて達。

「じゃ、俺達も帰るか」

「はい！」

元気よく返事をしてはやては士と共に帰路についた。

「ごめんなさい、はやてちゃん」

今日の夜、シャマルははやてに謝っていた。

「気にしてへんよ。それより夕ご飯やからシグナム達呼んできてな」

「は、はい」

慌てるシャマル。

「大切な仕事なんだから別に謝らなくてもいいものだがな」

すでに食卓にしていた士がそう言った。

「仕方あるまい。シャマルはああいう性格だからな」

そう告げて食卓にやってきたシグナム。

「おい士！はやてに余計な事してないよな」

士を睨みつけながらそう言うヴィータ。

「心配するな。何もしてない」

「ほな、夕食いただこか」

そして、いつもの食卓に士も加え楽しく過ごすはやて達。

「じゃあ俺は先に休ませてもらう」

夕食を終えそう言う士。

「はい、士さん今日はすみませんでした」

士の後を追いかけてそう言うシャマル。

「問題ない。明日以降もはやての事は俺に任せてはやての為にやる事やってこい」

「はい、ありがとうございます」

そして士は用意されている自室で早々と就寝するのだった。

そして、今日のお昼頃ただ一匹動いていたキバーラはある出会いをしていた。

「と、いうわけなのよ」

とある家の中に招待（？）されていたキバーラ。

「他の世界からって・・・フェイトちゃん・・・どう思う？」

そう聞いたのは今いる家・高町家に住んでいる女の子・高町なのだった。

現在そのなのはの自室にて、家の近くで出会ったキバーラと話をしていた。

「まあ、僕もなのは達から見たら異世界の住人みたいなものだからね」

そう言ったのは少年、ユーノ・スクライア。

しかし今は、フェレットの姿で話をしていた。

「それで一緒にこの世界に来た人って・・・」

そう聞いたのはなのはの親友である、フェイト・テストロッサ。

「ちょっと分かれてこの世界を見てたんだけどね、気付いたら何処に行ったのか」

そう言うキバーラ。

「なのは、どうする？」

「今ユーノ君もペットみたいな感じにいるし私が預かるよ」

そう言うなのは。

「私達の方はダメなのか？フェイト」

そう言ったのは子犬の姿をしている・アルフだった。

「私はどちらでもいいわよ。彼と合流出来ればね」

そう告げるキバーラ。

「私が預かるよ、なのは。クロノ達もいるしきつと大丈夫」

「うん、じゃあお願いっ」

そんな訳でキバーラはフェイトの家に滞在する事になっていったのだった。

そして、この世界の運命の流れはこの世界の人達と士達を動かしていくのであった。

第5話：接触（1）

それから数日・・・。

何事もなく平和に過ぎていった日常。

そしてはやても、一人増えた家族との一時を楽しんでいた。

「今日はフリーでいいのか？」

シャルルにそう尋ねる士。

「はい。今日は私とザフィーラがこちらにいますから、士さんは今日一日ゆっくりしててください」

そう言うシャルル。

「まあ、そう言う事ならゆつくりさせてもらう・・・しかし、はやての為とはいえあいつ等の方が無茶すぎじゃないのか？特にあのヴィータとかいう小さい奴」

心配しているのか、そんな事を言う士。

「わかってはいますけど・・・それよりも何よりも私達ははやてちゃんが自由に歩いていけるようになる事が願いですから」

そう言うシャルル。

「・・・はやてもせつかくのシャルル達との一日だ。俺は外で時間

を潰してくる」

そう告げると立ち上がる士。

「あつ、士さん。お昼ご飯は・・・」

シャマルが聞くと

「・・・・・・・・わかった。昼には戻る」

それだけ言つて士は外へと出て行つたのであつた。

「さて、急に一日空いたわけだが・・・と、すっかり忘れていたな・・・キバーラの奴、何処にいるんだ？」

とりあえず士は、暇なのでキバーラを探しながら町を歩いていくのだつた。

その頃こちらはフェイト達が暮らしている家。

そこにはフェイトだけでなく、クロノ、リンディ、アルフ、エイミイ、そしてなのはもここにいた。

もちろん、数日前からお世話になっているキバーラも・・・。

「何度か接触しているものの、未だ拘束できない・・・」

そう言うクロノ。

「闇の書が完成すれば大変なことになるわ。だから何としても早く

止めないと」

そう告げるリンディ。

「うん、これ以上犠牲を出さないためにもね」

そう言うのは。

「で、必要なのがキバーラちゃんの仲間の門矢士さんなんだよね」

そう告げるエイミィ。

「どれほどの力を持っているかは知らないが、奴等を捕まえるためには戦力は多い方がいい」

そう考えるクロノ。

「じゃあ、私ののはでキバーラと一緒にその士さんを探してみます」

フェイトがそう言う

「うん、だからクロノ君達は闇の書の方をお願い」

「今度こそ捕まえてみせる・・・絶対に」

そう意気込むクロノ。

そして話し合いが終わるとなのはとフェイトは、キバーラと共に士を探すために町へと出て行くのであった。

第5話：接触（2）

運命は誰が決めているのだろうか。

離れて行動していた士とキバーラ。

それぞれがはやて達、なのは達と出会い過ごしていた日々は順調だった。

しかし、運命のいたずらは今ここで起きてしまうのであった。

「・・・」

ほんの少しかもしれない可能性。

それとも、運命が導きあわせたのであろうか・・・。

街中を歩いていた士となのは達は、その道端で出会ってしまつことになるのだった。

瞬間的に目と目が合う士とキバーラ。

今の状況が良いものなのか、悪いものなのかわからずに動けずにいるキバーラ。

その中で、最初に動いたのは士だった。

「何だお前達は・・・」

そう聞く士。

「キバーラ、この人が士さん？」

フェイトが聞いてみるものの、答えようとしないキバーラ。

（シグナム達に話は聞いていたが・・・あいつ等が管理局とやらか・・・キバーラと一緒にいる理由は謎だが・・・今ここで俺達のこと
がバレるとまずいな）

そう思った士は、ディケイドライバーを装着しカードを一枚手にした。

（見たところはやてと同じ年ぐらいだけど、ここは押し通らせてもらうぜ）

士はカードをセットさせた。

【カメンライド・ディケイド】

音声と共にディケイドに変身した士。

「今の・・・デバイス？」

不思議そうに見ているなのは。

「わからないけど、向こうは戦う気みたい・・・」

そう言うフェイト。

「人の気配はあまりないが街中じゃ戦えないな・・・」

と、新たにカードを取り出しセットするディケイド。

【カメンライド・ブレイド】

ディケイドは仮面ライダーブレイドへと変身した。

「姿が・・・」

驚いているのはとフェイト。

「場所、変えるぜ」

【アタックライド・マッハ】

カードをセットした直後、高速で移動するDブレイド。

「なのは!」

「うん!」

なのはとフェイトは、それぞれ待機モードのデバイスを取り出した。

「「セットアップ!」」

同時に叫ぶのはとフェイト。

己の身体をバリアジャケットで覆い、宙に舞う二人。

そしてキバーラもまた、この状況を見守るために追いかけるのであった。

「ここいらでいいだろ・・・人もいないしな」

と、ここでブレイドからディケイドへと戻った。

「貴方、一体何者ですか」

追いついてきたフェイトがそう聞いた。

「俺もお前達の事を知りたい。なら、やるしかないだろ」

そう告げるディケイド。

「戦わなくても話し合えば・・・」

そう言うのはだったが

「話し合いだけで解決しない問題もある・・・さあ、来い」

なのは達に先手を譲る構えを見せたディケイド。

「仕方ないよなのは。私が突撃するから、なのはは後方から援護を」

「気をつけてね、フェイトちゃん」

そしてフェイトは、デバイス・バルディッシュを握り締めディケイドに向かっていくのであった。

第5話：接触（3）

フェイトの攻撃に対して、ディケイドはライドブッカーをソードモードにして応戦した。

「面白い武器だな」

そう言うディケイド。

「話してもらってから。貴方が何者なのか・・・」

そう言いながらフェイトは、バルデッシュを上手く使いディケイドを弾き飛ばした。

「さすがに子供に負けるのは嫌だな・・・そういやこいつも子供だったっけな」

ディケイドはそう言うカードを一枚取り出した。

「変身！」

【カメンライド・キバ】

音声と共に仮面ライダーキバへと変身したディケイド。

「また姿が変わった・・・」

離れた場所から様子を伺っているのはがそう呟いた。

「お前と同じようなスタイルで戦ってやるぜ」

【フォームライド・キバⅡガルル】

と、Dキバはガルルフォームへと変化した。

「今度はこっちから行くぜ」

と、Dキバはガルルセイバーを手にフェイトに向かっていった。

ぶつかり合う刃と刃。

「あの人フェイトちゃんと良い勝負してる……って、私もちゃんとやらないかいけないよね」

レイジングハートを構えるなのは。

（これで本当にいいのかしらね……）

なのはの後方で戦いを見守っていたキバーラはそう思っていた。

「後ろのあいつは遠距離攻撃タイプか……気をつけないとな」

フェイトと戦いながらも、なのはの行動も見ていたDキバ。

「行くよレイジングハート！」

魔力を高めていくなのは。

（なのはが来る……）

そう感じたフェイトは、Dキバを放り上げるように攻撃した。

「なっ！？」

「なのは！」

合図するように叫ぶフェイト。

「うん！」

すでに攻撃準備を完了していたなのは。

「アクセルシューター！！」

放たれた複数の射撃魔法。

「ぐっ・・・この状態じゃ反撃が・・・」

そして、Dキバに直撃するアクセルシューター。

「やった・・・全弾直撃」

そう言うフェイト。

と、爆煙の中から飛び出してきたDキバ。

しかしその見た目は更に変わっていた。

「何とか凌いだな・・・仮面ライダーキバ・ドッグフォーム・・・」

こいつのおかげで助かった」

「私のアクセルシューターを受け耐えた・・・」

驚いているのは。

「今度はこっちの番だな」

Dキバは新たなカードを取り出しセットした。

【フォームライド・キバⅡバツシャー】

再びDキバの姿が変わり、武器も銃のバツシャーマグナムにチェンジした。

そしてすぐさまなのはに銃弾を放つDキバ。

「なのは！」

防御の魔法でDキバの攻撃を防いでいくのは。

連続銃撃でなのはの周囲は煙に包まれていった。

「そんな攻撃を繰り返しても、なのはの防御は崩せないから」

そう告げるフェイト。

「そいつはどうかな」

そう言いながらも銃撃を続けるDキバ。

しばらくして銃を降ろすと、Dキバはディケイドへと戻った。

「なのは、大丈夫」

煙の中のなのはの方へ向かっていくフェイト。

「・・・ちよつとね・・・」

煙が風に流されなくなっていくと、フェイトは驚きの表情をみせた。

「なのは、腕に怪我・・・」

「大丈夫、かすり傷だから」

と、フェイトがよく見るとなのはの腕にはキバーラが抱えられていた。

「キバーラちゃんを狙って攻撃するなんて・・・」

そう言うなのは。

「悪いな、これが俺のやり方だ」

なのはとフェイトに対して、そう言い放つディケイドなのであった。

第5話：接触（4）

なのはを心配しつつも、ディケイドと向かい合うフェイト。

「なのはを傷つけた貴方を許せない」

そう告げるフェイト。

「まだやるなら相手になるぜ」

ライドブッカードを構えるディケイド。

だがその時

『ラケーテン！』

何処からかそんな声が聞こえてきた。

「ハンマー！！」

なのはの背後に現れた人物は勢いよく、デバイス・グラーファイゼンを振り下ろした。

「ううっ・・・ヴィ、ヴィータちゃん」

とつさに防御魔法を使いその人物の登場に驚くなのは。

「なのは、今助けに・・・」

なのはの援護に向かおうとしたフェイトであったが、目の前に新たな人物が現れ動きを止めた。

「シグナム・・・」

「悪いなテストロッサ。こんな場面では戦いたくはないが」

そして、ディケイドもヴィータ・シグナムの登場に驚いていた。

「何であいつ等が」

そう思うディケイド。

だが、その時ディケイドの足下に魔法陣が出現した。

「これは・・・」

驚くディケイド。

『心配しないで。じっとしていれば大丈夫だから』

と、頭の中にシャルルの声が聞こえてきた。

「転送魔法陣・・・あの人・・・ヴィータちゃん達の仲間・・・」

止めようとするフェイトだが、シグナムに行く手を阻まれていた。

「ここは引いておけ。傷の手当が先ではないのか」

そう言うシグナム。

「貴方達を逃がすわけにはいかない・・・けど・・・」

やはりなのはが心配なフェイト。

と、ヴィータやシグナムの足下にも魔法陣が出現した。

「待つて・・・ヴィータちゃん」

そう言うのはだが

「次に会った時は叩いてやるからな」

そう言い返されたのは。

そして、ディケイド達は転送魔法によりこの場から離脱していったのであった。

そして、八神家へ戻った士達は・・・。

「ちょっとヴィータちゃん・・・」

何やら焦っている様子のシャル。

何故ならヴィータが士の部屋に乗り込み、グラーフアイゼンの先端を土に向けていたからである。

「落ち着けヴィータ。主はやてに心配をかけることになる」

そう告げたザフィーラ。

「あたしはお前を許さねえ。一步間違えば管理局の連中に捕まってたんだぞ」

そう言い放つヴィータ。

「悪かった。だが、事態はいい方向に動いているらしい。あつちにキバーラがいた。合流出来れば何か情報を得られるだろうしな」

そう告げる士。

「今度何かしでかしたら管理局より先に叩いてやるからな」

そう言うところグラーフアイゼンを降ろし、部屋を出ていったヴィータ。

「しかし先程の話。危険ではないのか？」

士に尋ねるザフィーラ。

「まあ、キバーラも合流を狙ってるだろうしな。念のためお前達は遠くにいればいい。手助けもいらさないからな」

そう言う士。

「わかりました。でも無茶はしないでください。はやてちゃん、士さんの事も家族の一員だと思っていますから」

そう告げるシャマル。

「ああ、出来る限りな・・・」

そんな訳で土は明日に備え、早々と眠りについていくのであった。

第5話：接触（5）

翌日。

午前中ははやてにつきつきりで時を過ごしていた士。

「午後は私のはやてちゃんと一緒にいますから、士さんは自由にしてください」

そう告げたシャマル。

「すまないな」

一言だけ告げる士。

そして午後。

士は街中をのんびりと歩いていた。

「そろそろか・・・」

そう呟く士。

「やーっと一人になったわね・・・士」

そう言い空から急降下してきたのはキバーラだった。

「それはお前もだろ・・・しかし・・・俺達がこの世界で知り合った奴等が敵同士だとはな」

そう言う士。

「とりあえず情報を一つにまとめましょ。この世界でやる事もわかってないんですよ」

そう告げるキバーラ。

「そうだな・・・」

そんな訳で互いの持つ情報を公開する士とキバーラ。

「それは本当の話か？」

確認の為にそう聞く士。

「そうみたいよ。闇の書についてのを・・・」

キバーラの話聞きながら、何やら考えていた士。

「まあ、あいつ等の事は大体わかった。行動と行動の意味も・・・だが・・・何とかなるのか・・・」

士がそう思っていると、何処からか飛んできた攻撃が士の足元に着弾した。

「!？」

その直後辺りを見渡し攻撃してきた人物を探す士。

「探さなくていい。攻撃したのは僕だ」

と、土とキバーラの前に姿を見せた少年。

「お前は・・・」

「時空管理局・執務官、クロノ・ハラオウン」

そう名乗ったクロノと言う少年。

「管理局・・・あの二人組の仲間か・・・ならあいつらも・・・」

そう考えた土であったが

「ここにいるのは僕一人だ。隠れてたりもしていない・・・貴方も
そうでしょう・・・」

そう告げたクロノ。

「何が目的だ？俺を捕まえに・・・」

土がそこまで言うと

「はじめはそのつもりだった。だけどそのキバーラの話聞いて直
接話をしてみたくなった」

そう言うクロノ。

「俺と話してお互い何の得がある？敵同士じゃないのか？」

「君とキバーラは別世界から来た。だから情報がまだ曖昧で真実を知らない・・・僕・・・いや僕達は何としても犠牲を出さずにこの事件を解決しなければならない。それを彼女たちも望んでいる」

そう告げるクロノ。

「・・・お前達は闇の書とその関係者を捕まえてどうする気だ？」

尋ねる士。

「・・・これから話すことを聞いてほしい。僕達は闇の書の主も救いたい」

そしてしばらくの間、クロノの話を聞いていた士。

「・・・その話・・・確実な信用性はない」

そう告げた士。

「無理に信じろとは言わない。だけど闇の書の影響は主に出ているはず。それを忘れないでほしい・・・それと次は管理局として君を討つ・・・そのつもりでいてくれ」

そう言い残し飛び去ろうとするクロノ。

「待て・・・最後に一つだけ・・・」

「何だい・・・」

「お前の話が真実なら俺が戦った彼女達も本当は戦いを望んではい

ないという事なんだな」

そう聞く士。

「・・・誰も戦いたくて戦っているんじゃない・・・僕もみんなも・・・」

そう告げるとクロノはそのまま飛んで何処かへ行ってしまったのだ。
った。

「話に入り込めなかったけど・・・これからどうするわけ？」

そう聞くキバーラ。

「俺はあいつ等と話をしてみよう。キバーラは今まで通りあつちに
いればいい・・・あとはこの世界に流れる運命が道を示す・・・は
ずだ」

そう言う士。

「でもそろそろ何かいやな感じがするのよねえ」

そう呟いたキバーラ。

だがそんなキバーラの予感が当たることになるとは、今の士達も気
付かないのであった。

第6話：闇の存在（1）

先日、管理局のクロノと接触した士。

そこで得た情報・・・。

八神家に戻ってから一晩、士は考えていた。

「どうしたんですか？」

と、リビングにいた士に声をかけてきたシャマル。

その傍らには、獣姿のザフィーラもいた。

「今日はゆっくりだな・・・他の二人はどうしたんだ？」

「今日はシグナムもヴィータちゃんもはやてちゃんについて行つて
ますよ」

そう答えるシャマル。

「まあ、少し話をするには丁度いいか」

そう告げる士。

「話とはなんだ？」

そう聞くザフィーラ。

「管理局のクロノって奴が接触してきた」

「!？」

士の言葉に驚くシャルとザフィーラ。

「それは昨日の出来事なんですか？」

尋ねるシャル。

「ああ、そうだ・・・」

「だがその割には昨日は普通に帰ってきたようだが・・・」

そう言うザフィーラ。

「士さん・・・」

「どちらにしてもシグナム達にも話したいことだ・・・まとめてが
いいなら夜に話すが」

士がそう言うと考えるシャル。

「わかりました・・・ですが夜ははやてちゃんも家にいますから、
場所を変えてもらう事になると思いますが」

そう告げるシャル。

「わかった。俺もはやてをこれ以上ゴタゴタに巻き込みたくないし
な」

そう言うと土は、立ち上がり自室に戻っていった。

「シャル・・・どうするつもりだ？」

静かに聞くザフィーラ。

「・・・導き・・・なのかもしれませんね」

そう呟くシャルなのであった。

そして、夜。

みんなでの夕食、楽しい会話も終わりシグナムがはやてを部屋へ運んでいった。

「なんなんだ・・・はやてがいなくなったらこの辺りの空気が重く・・・」

そんな風感じていたヴィータ。

「シャルから簡単に話は聞いている・・・主はやてが眠りについたらじっくり聞こう」

戻ってきたシグナムが土にそう言った。

そして場所を屋外の公園に移して土は話を始めた。

管理局との接触や、向こう側の事など・・・。

「てめ……！」

話の途中で飛びかかりそうになったヴィータを制止させるシグナム。

そして士は、自分の思いもシグナム達に告げていた。

「お前の話は聞かせてもらった……」

そう告げるシグナム。

と、突然デバイス・レヴァンティンを士に向けたシグナム。

だが、士は微動だにせずじっとシグナムを見ていた。

「……今こちらは四人……裏切るかもしれないお前を始末するのは簡単だ……だが、主はやてはお前も家族の一員だと思っている……」

そう言うレヴァンティンを降ろすシグナム。

「……」

「私は士さんを信じてみたいです……外の世界から来た彼は……きつと闇の書の悲しみの連鎖を断ち切ってくれると……」

そう語るシャル。

「私もお前を信じるとしよう……だが、信じるのはお前だけだ。管理局の奴等を信じたわけじゃない……それを覚えておけ」

そう言い放つシグナム。

「では戻るとしよう・・・」

そんなザフィーラの一言で、家へと戻っていった土達。

そして、土達がいなくなり静けさを取り戻した公園。

静まりかえったその公園内に出来ていた夜の闇。

そんな闇の中からゆっくりと姿を現した謎の存在。

『感じる・・・強い力・・・俺の・・・物にする』

そう呟いたその存在は、そのまま闇の中へと消えていくのであった。

第6話：闇の存在（2）

翌日。

天気の方はおもしろくなく、空には分厚い雲が広がっていた。

「何だか誰かの心を写した感じの空だな」

そう呟く士。

そんな時だった・・・。

突然開けていた窓からキバーラが飛び込んできたのだった。

「おい、いきなり乱入してくるな・・・まだ、あいつらだってここに・・・」

士がそう言つと

「大変だから飛んできたのよ！襲われたのよ」

そう告げたキバーラ。

「襲われただと・・・誰が・・・」

「あの子達よ」

キバーラがそう告げると、士はなのはとフェイトの事を思い出していた。

「ちょっと待て・・・いつの話だ。シグナム達が直接戦いにいくなんて・・・」

士がそう言つと

「見たこと無い奴よ。人じゃないモンスターよ」

「・・・この世界に獣人はいるが・・・まさか夏美の世界に現れた奴みたいにな・・・この世界にも・・・」

そう考える士。

「で、どうするのよ」

そう聞くキバーラ。

「シグナム達と話をしてそっちと合流する・・・キバーラはあいつ等・・・いや、クロノって奴と話をつけてきてくれ。その件について協力したいとな」

そう言つとりビングにいるシグナム達の元へ向かう士。

そしてキバーラも窓から外へ飛び立った。

士がりビングに行くとそこにはシグナム・ヴィータ・ザフィーラしかいなかった。

「はやてはシャマルが連れ出してるのか・・・好都合か」

そう告げる士。

「なんだ、また何か企んでやがんのか！」

「話を聞け」

と、真剣な表情の士を見たシグナムはヴィータを抑えた。

「何かあったのか？先程から話し声が聞こえていたが、お前の仲間が何か伝えに来たのか？」

そう聞いたシグナム。

「ああ、管理局のあの二人が襲われた」

「！？」

その話に驚くシグナム達。

「テストロッサもか・・・」

「しかしどういう事だ・・・我々以外にも奴らと敵対している者がいるのか・・・」

そう告げるザフィーラ。

「だったら問題ないだろ。管理局の奴らがいなくなりゃこっちが・・・」

そんな事をヴィータが言うと

「事態は最悪な方向に向かうかもしれないんだ・・・聞いておけ」

そんな訳で話をする士。

「少し信じられぬ話ではあるが・・・」

ザフィーラがそう言う

「だが、異世界から士が来ている以上・・・真実かもしれないが」

そう告げるシグナム。

「すまないが今から俺は奴らと会ってくる・・・大変なことが起きる前に解決できるなら解決する・・・この世界を滅茶苦茶にはしたくないから・・・家族のためにもな」

そう言う士。

「わかった・・・我々も主はやての無事を最優先させたいから・・・」

「頼んだぜ」

そう告げ外へと向かった士。

「ザフィーラ、ヴィータと一緒ににはやての元へ・・・」

「心得た」

それだけ告げるザフィーラ。

そして土はというと、途中で待機していたキバーラと合流して、なのは達が集まっている家の前にたどり着いたのであった。

第6話：闇の存在（3）

士が玄関に近付くといきなり扉が開いた。

「!？」

驚く士。

「キバーラから話は聞いているわ。門矢士さんね・・・入って」
そう言ってきたその女性。

「あんたは・・・」

「リンディ・ハラオウン。貴方も良く知るクロノの母よ」

士に自己紹介するリンディ。

そして、リンディに案内された士が見たのは傷の手当を受けていた
なのはとフェイトであった。

「あつ・・・」

士を見て立ち上がろうとしたフェイトを止める女の子。

「まだ安静にね・・・と、貴方がなのはちゃん達と戦った・・・え
っと・・・」

「門矢士だ・・・で、そう言うあんたは誰だ？」

そう聞いた士。

「エイミィ・・・と、自己紹介してる場合じゃないんだよね、クロノ君」

エイミィがそう言うのと奥の部屋から姿を見せたクロノ。

「俺と戦えなくて残念か？」

「貴方を敵だと判断したら容赦なく戦う・・・だけど今はこの事態を何とかするのが先決」

そう告げるクロノ。

「キバールから聞いて状況は大体わかってる。そいつ等を襲った奴の正体は知らないが・・・俺達と同じ世界を越えてきたかもしれない」

そう告げる士。

「士さん・・・」

と、士に話しかけてきたのは。

「なんだ？」

「力を貸してくれるんですか？」

そう聞いてきたのは。

その表情は真剣だった。

「俺は以前世界の破壊者とか呼ばれていたが、世界を破壊する気なんてない・・・俺がこの世界を守ってやる」

そう言い放つ士。

「・・・じゃあその前に・・・」

と、フェイトがそう告げた。

「フェイトちゃん？」

横で不思議そうな顔をしているなのは。

「なのはに謝ってください。前の戦いでなのは・・・」

少し悲しそうな表情をしてそう言うフェイト。

「・・・あの時は一応敵・・・だったしな・・・だが・・・すまなかったな・・・俺は危うく仲間になる奴を倒すところだったわけか」

そう告げる士。

「・・・最後になるが・・・」

そう告げるクロノ。

「あいつ等の事だろ」

理解した上でそう言う士。

「貴方から何か話はしたのかしら？」

そう聞いたリンディ。

「一応はな・・・だが、あいつ等はこっちの連中と協力する気はないらしい。俺を除いてはな」

そう告げる士。

「クロノ君・・・」

そう呟くエイミィ。

「不本意だけど貴方が一番闇の書に近付いてる。こんな事が起きている上に闇の書も敵に回せば僕達は恐らく・・・」

そこで言葉を止めたクロノ。

「出来る限り争いが起こらないようにしとくよ・・・じゃあ俺は行くぜ」

そう言うのと立ち上がる士。

「なら、私もついて行くわよ」

と、キバーラが後ろからついてきた。

「気をつけてくださいね」

怪我をしていながらそう言い微笑むのは。

「ああ、問題ない」

そう言っ外へ出て行った士。

だがこの時士は知らなかった。

すでに大変な事態が起きていることに・・・。

そしてこの世界での異変は確実に広がっていきこうとしていたのだった。

第6話：闇の存在（4）

八神家へと戻ってきた士とキバーラ。

家の中に入った士達は、中の光景を見て啞然となっていた。

「これは…どういうことだ」

家の中は椅子やテーブルが倒れ、いくつか棚の中のものも床に落ちていた。

「！？…はやて」

士はすぐさまはやての部屋へ向かった。

「…手遅れ…そういうことなのか」

そう呟く士。

「グッ、士…か？」

と、壁際から声がする事に気付いた士は辺りを見渡した。

すると、そこにシグナムが壁に寄りかかるように座っていたのだった。

「おい、シグナム。これはどういうことだ。大体はやては…」

そう告げる士。

「…私達は…突然現れた謎の怪物から主を守ろうと戦った…が、及ばなかった…屋外での戦いであれば全力も出せたのだが…」

そう言うシグナム。

「じゃあ、はやては…」

「主…はやては…闇の書と共に連れて行かれた…士…あれがお前の言う異世界の怪物なのか？」

「おそらく…だが、闇の書ごと持って行って何をするつもりだ」

そう言う士。

「士、向こうに連絡しておいた方がいいんじゃないの？やっぱり嫌な予感当たってるみたいだし」

そう告げるキバーラ。

「ヴィータ達が後を追ってはいるが三人とも手負いだ…士、私も回復したらずぐに出る…それまで…主はやてを…」

「…安心しろ。はやては俺が助けてやる…キバーラはあいつらに連絡を頼む…シグナム、ヴィータ達に連絡できるんだろ？俺も合流する」

そう告げると飛び出していった士。

「私も…じっとしているわけにはいかないな」

そう呟いたシグナムであった。

その頃、シグナムからの連絡を受けたヴィータ達。

そして、シャマルからの連絡を受けた士はそんなに時間もかからずにヴィータ達と合流した。

「そんな身体で戦えるのか？」

そう聞く士。

「はやてを助けるためならボロボロになってもいい…それにシャマルが回復してくれてるんだ…しばらくは問題ねえ」

そう言ったヴィータ。

「で、あそこにいるのが…」

闇の書を手にし、はやてを抱えていた謎の怪物。

「はやてが一緒に攻撃できないか…」

「だが、奴も主はやてを傷つけないようにしているようだ…目的はわからないが…」

そう告げるザフィーラ。

「なら俺が出る。俺が奴をひきつけている間にはやてを助ける」

そう言いながらディケイドライダーを取り出した士。

「いくらなんでもお前ひとりじゃ無理だ。私たちだって…」

そう言うヴィータ。

「…俺はいつものようにやるだけだ…じゃあ、行くぜ」

士はすぐさま仮面ライダーディケイドに変身した。

「ん？」

姿を見せたディケイドに反応する怪物。

「色々聞きたい事とかはあるんだけどな…とりあえず名前ぐらい名乗ったらどうだ」

「俺か…俺はガイア…この世界とこの世界の力を手に入れる者だ」

そう告げたガイア。

「悪いがその女の子は俺の家族だ…返してもらっぜ」

「それはできない…これは鍵だ…俺が最強になる…鍵となる」

と、ガイアの身体から湧き上がってくる黒い煙。

「…とりあえずはやてをあいっから引き離したいが…あの煙は何だ」

そして、そんな様子を物陰から伺っているヴィータ達。

「いいのかよ、あいつだけに行かせて」

そう告げるヴィータ。

「今の俺達が加勢しても力になれるかわからない。ならば、主はやての救出に全力を注ぐ方が効率がいい…土はそう判断したのだろう」

そう言うザフィーラ。

「お前も俺も狙いはこの鍵…だが、お前等に返すつもりはない」

と、はやてと闇の書が次第にガイアから湧き上がる黒い煙に包まれていった。

「何を…」

「これが俺の能力…対象としたものを取り込む…その物の力も全てこの身に宿す事が出来る…俺をこの世界に送り込んだ主から与えられた力…そして、世界と力を手に入れるのが俺の使命」

「はやてを取り込むだと」

驚くデイケイド。

「まさか、闇の書まで…でも、そんな事をしたら」

そう言うシャル。

「我慢できねえ、出るぞ！」

と、飛び出して行ってしまったヴィータ。

「確かにこの状況はまずいな、シャマルはここで援護を…」

そう告げるとザフィーラは獣人型になり、前線に出ていった。

「お前ら…」

「ザフィーラ！あの煙を蹴散らすぞ」

そう叫ぶとガイアに向かって言ったヴィータとザフィーラ。

「お前達はあの家にいた…だが…手遅れ」

はやてと闇の書が完全に黒い煙に包まれると、強力な衝撃波が辺りに放たれヴィータとザフィーラを弾き飛ばした。

「はやて！」

何とか着地し、再びガイアに向かっていくヴィータ。

「グラーファイゼン！ラケーテンフォーム！」

ヴィータはグラーファイゼンをラケーテンフォームに変化させて攻撃を仕掛けた。

「おい、中にははやてが…」

「…これが八神はやての魔力…闇の書の力…これより私が…この世

界の王…」

と、ガイアは手をかざし衝撃波を一点に集中させヴィータに放った。

「グワッ…」

弾き飛ばされ壁に激突するヴィータ。

「こんなところで戦うのか…さすがにまずいだろ」

そう言うディケイド。

「この私の力を試すにはお前達が全力でないと面白くない…力を持つもの以外を排除してあげよう」

と、ガイアから全方位に放たれたエネルギーの膜。

それはあっという間にこの街全体に広がっていった。

「この力は…」

そう言うシャルル。

「力を持たない者はこの街より外に排除した…後はお前達が全力になるのを待つのみ…明日の朝…この場所にて待つ…」

そう告げると姿を消したガイア。

そして、その直後にキバールが連れてきたのは・フェイト・クロノがやってきたのであった。

第7話：戦いへの覚悟

「えっと・・・どうしたらいいかなクロノ君」

そう聞いたなのは。

「士、話を聞かせてもらいたいんだが」

そう告げたクロノ。

「こんな所じゃなんだろ・・・お前らの所でこいつらも交えて話したい・・・それでいいか？」

シグナム達を見ながらそう言った士。

「僕たちは構わない・・・今は緊急事態だから・・・あとは・・・」

クロノもシグナム達を見た。

「おい、シグナム」

と、そう言うヴィータ。

「本来なら相入れる事はないが我々も主を助けない・・・」

「今のあいつは少々厄介だろうから・・・」

そんなわけでフェイト宅にて話し合いが行われることとなった。

「何だが凄い事になってるね」

そう呟くエイミィ。

「とりあえず話し合いを始めるわけだが・・・」

そう言っ始めるクロノ。

「あの～士さんが言っていたその異世界の魔物って・・・」

と、士に聞いたのは。

「俺も初めて見る奴だが・・・まずはあいつからはやてを助け出さないとな」

そう言う士。

「クロノ・・・闇の書も取り込まれたけど、どうなっちゃうのかな？」

そう尋ねるフェイト。

「だからこそその緊急事態なんだ。こちらで計画していた作戦も恐らく役に立てなくなったと思う。それに取り込まれたことでどんな影響が出るのかも・・・」

そう言うクロノ。

「そう言えばさっきはやてって・・・それってすずかちゃんが言ってたはやてちゃんってこと？」

そう聞くなのは。

「……そうです……私が一番はやてちゃんと一緒にいましたから……そのすずかちゃんって子も……」

そう告げるシャマル。

「敵対していても知らないところで関わり合いになっていたとはな」

そう言う士。

「とりあえずそう言った話はそれぐらいにして……本題に戻りましょう」

そう言ったのはリンディであった。

「まずはあいつのあいてだが……俺がやる」

そう言い放つ士。

「それは許可できない。あいつを倒すにはみんなの力を……」

そう告げたクロノ。

「そんなことをして一人ずつ潰されていったらはやてを助け出すことが出来ない。俺達の目的は敵の撃破と共にはやての救出だろう」

そう言う士。

「確かに無茶な事かもしれないけど、私もフェイトちゃんもはやてちゃんを助けたい思いは土さんと同じだよ・・・」

そう告げるのは。

「この男の実力はまだ未知数だ。それに俺も主はやてを救いだしたい。それにもしもの場合は加勢に入る・・・それでどうだ？」

そう提案したザフィーラ。

「だそうだけど、どうするの？クロノ君」

そう聞いたエイミィ。

「もしもと言うなら僕も加勢する、動きを止めるなら僕のデバイス・デュランダルが適しているから」

そう答えたクロノ。

「では、こちらからはザフィーラ・・・そして・・・」

「管理局からはクロノね」

そう告げるシグナムとリンディ。

「そして中立な土ね」

そう言ったキバーラ。

「明日は早い・・・今日はもう休んだ方がいいだろう・・・」

士がそう言つと

「そうだな・・・我々は先に戻っているぞ士」

そう告げるとシグナム達はこの場をあとにした。

「さてと・・・クロノ、まだ話したいことがあるんだろ」

シグナム達がいなくなつてからそう言つた士。

「？」

士の言葉に疑問符を浮かばせるのはとフェイト。

「リンディ提督を中心として話して立てた対策・・・」

そう呟くエイミィ。

「アルカンシエル・・・最後の切り札・・・その使用許可もおりている・・・」

そう告げるリンディ。

「アルカンシエルがどういうものかはあえて聞かないが・・・はやてを奴から引き離すまで・・・」

士がそこまで言つと

「もう事態は変わっている・・・とにかく僕達も明日に備えよう。」

何が起こるかわからない戦いになるけど・・・」

「ええ、頑張りましょう」

リンディのその言葉にメンバーは意気込むのであった。

そして・・・。

この世界の運命が決まる時がやってくるのであった。

第8話：最初の世界、最後の戦い

「…」

前回ガイアと出会った場所に、無言で立っている士。

その少し後方にはクロノと、人獣形態のザフィーラが立っていた。

そして、気配を消してこの辺りに散らばって隠れているその他の仲間達。

「…来たか」

気配を感じたのが見上げる士。

「この私に挑むのは三人か…」

「別に後ろの二人はついでだ。お望みなら俺一人で戦ってやるぜ」

そう告げる士。

「…私も弱き者とは戦いたくはない。強き者でなくては今の私の力を試せない」

そう言うガイア。

「あの野郎…」

飛び出しそんな表情を見せるヴィータ。

『感情を抑えろ…私達の目的は主はやての救出だ』

そう通信で伝えたシグナム。

戦いが正に始まるという時、更に他の場所ではユーノ・アルフ・シヤマルが後々の展開に備えて控えていた。

「なのは達が直接戦って危険にさらされるのに僕達は…」

そう言うユーノ。

「ですが私達の役目も大きいです。上手くいけばですが…はやてちゃんもこの世界も犠牲にせずに闇の書の闇の部分を倒せるかもしれませんから」

そう告げるシヤマル。

そして、士達がいるこの世界・星の外…宇宙空間にある巡行艦・アイスラにて待機しているエイミィとリンディ。

「この作戦…上手くいくといいですね」

そう言うエイミィ。

「行かせなきゃ地上で戦っているみんなも…この世界も終わりよ…でも、私は信じているわよ。みんながやってくれるってことを…」

自信たっぷりの表情を見せるリンディ。

そして、ガイアと向かい合う士。

「力を発動させる…そのお前を私が倒す」

「お望み通り…行くぜ！」

士はすぐさま仮面ライダーディケイドへと変身した。

後方にいるクロノ・ザフィーラもいつでも戦えるよう構えた。

「覚悟しろよ」

ライドブッカーをソードモードにして、斬りかかるディケイド。

そんなディケイドの攻撃をもともせずさばいていくガイア。

「なら、これだ！」

【アタックライド・ブラスト】

ブラストのカードを使い、離れた場所から連撃するディケイド。

だが、ガイアはシールドを展開させそれを全て防いだ。

「あのシールドは…」

そう呟くクロノ。

「闇の書も取り込んでいる。闇の書に記録されている力も自由に使えるということか」

そう考えるザフィーラ。

「だったら一気に決める」

【ファイナルアッタクライド・デイ、デイ、デイ、ディケイド】

その音声と共に跳び上がるディケイド。

「集束…」

ガイアが手をかざすと、周囲からエネルギーが次々と集束していった。

「なのは、あれって…」

物陰から様子を見ていたフェイトはある事に気付いた。

「あの攻撃…」

上空から自身のライダーマークが描かれたカードを通してライダーキックを放つディケイド。

「スターライトブレイカー」

集束されたエネルギーを一気に放出させたガイア。

そして、空中で起きる爆発。

それと同時にディケイドは弾き飛ばされ大地を転がっていった。

「なのは程の威力じゃなかったけど…それでも凄い攻撃」

「あつ…フェイトちゃん、私のSLB受けたんだよね…」

ちよつと申し訳なさそうに言うのは。

「私達が蒐集してきたのが仇になっているか」

そう呟くシグナム。

「俺のファイナルアタックを相殺どころか弾き飛ばすなんてな」

「…元々無理やり取り込んでいるからな…元の威力には及ばないよ
うだが…」

「元の威力って…本家はあれより凄いのか…」

そう言うディケイド。

「次は俺が行く！」

と、飛び出していったザフィーラ。

『テストロッサ…』

『シグナム？』

突然の通信に驚くフェイト。

『我々はある。主はやてを救いだせるかはわからないが、守護騎士としての役目は果たす』

そして、シグナムに続きヴィータも戦線に参加していった。

「お前ら…」

「悪いな士。どうもお前達だけでは太刀打ち出来ないみたいだからな」

シグナムがそう言った直後、ディケイドの代わりに戦っていたクロノとザフィーラがガイアの反撃を受け吹っ飛ばされていた。

「クロノ君まで…フェイトちゃん…」

「…まだはやてがあの中に存在しているなら…その意識に接触できたら…はやての意識を呼び覚まさせれば取り込みを解除できる…とか…」

そんな事を考えてみたフェイト。

「でも、それって今の私たちじゃ出来ないんじゃない…」

そう言うのは。

そして、大爆発が起き二人が視線を戦いの方に向けると仲間達が吹き飛ばす姿を目撃した。

「あいつ…徐々に力が増してやがるぞ」

「長期戦は不利…それどころか主はやてを救う可能性も…」

そう言うシグナム。

「なのは！」

「うん！」

我慢できずになのは・フエイトも戦線へ参加。

「リンディ提督…結局みんな戦線に出ちゃいましたけど…」

「これは予測済み。仲間達が傷つくのを見て黙っていられる子達じゃないわよ」

そう言うリンディ。

「土は下がっている」

「シグナム、俺はまだ…」

「あいつはお前と同じ異世界の者…なら、あいつを倒すきっかけはお前が作ることになるだろうからな」

そう言いガイアに向かっていくシグナム。

「きっかけ…と言われてもな…ファイナルアタックを余裕で迎撃してくる相手…どの力を使えばあいつを…」

ディケイドがそんな事を言っていると、突然目の前に光が広がりデ

イケイドはその光に包まれていったのであった。

「な、何だ」

『心配はいらない。ここは特殊な空間。外とは別空間であるが故に時は止まっている』

そう告げ一人の男がディケイドの前に姿を現したのであった。

第9話：メッセージ

「誰だお前は・・・」

そう告げる士。

そこで初めて士は、自分の変身が解けていることに気付いた。

「初めて会う私にそう思うのも無理はないだろうな・・・私は【横谷】というものだ」

そう自己紹介した横谷。

「横谷だと・・・まさか鳴滝の仲間か？」

睨み付けるような目をする士。

「君の言う【鳴滝】という人物を私は知らないな・・・まあ、君としてみれば早く外の世界に戻り仲間達を救いたいのだろう」

横谷がそう告げると

「だったらすぐに戻してもらおうか。何なら、力ずくでもいいぜ」

そう言う士は、ライドブッカーから【カメンライド・ディケイド】のカードを取り出した。

「では、私の目的を果たすしましょう・・・」

そう告げると横谷は懷から取り出した何かを土に手渡した。

それはまるでライドブッカーに似ていた物だった。

「その名は『パラレルブッカー』新たな世界を旅する君に必要なものですよ」

そう説明する横谷。

「お前・・・一体」

「詳しいことは後々話すことになるでしょう。では、そのパラレルブッカーが君達の助けになる事を祈っていますよ」

そう言うつ姿を消した横谷。

そして土は、再び光に包まれ意識は外の世界に戻っていくのであった。

「!？」

意識が戻ってきた直後、土が目撃したのは苦戦しているなのは達の姿だった。

「おい土！お前今まで・・・って、何で変身解除してやがるんだ」
そう言うヴィータ。

「悪い。訳のわからないやつに連れていかれたからな。だが・・・」

すぐさま土は、ディケイドへと変身した。

「何が起きたかは知らないが、お前の仲間は大分疲れているぞ」

そう告げるガイア。

「心配するな。ここからが本番だ」

そう言うディケイド。

だが、ディケイドも良い手があるわけではなかった。

あの不思議な空間で手渡されたパラレルブッカーが手元にあるのだが、その使い方をまだ知らないでいた。

「はやてを救う方は何か思い付かないのか？」

なのは達に尋ねるディケイド。

「通信魔法の類いではやてに声を届けられたらって……でも……」

「

そう告げるフェイト。

「シャマルが陰で試みているが、上手くいっていないようだ」

そう言うシグナム。

「だけど私達とはやては家族なんだ。絶対に声は届く！だからそれまでの間、あいつを止めるんだ！」

再びガイアに向かっていくシグナムとヴィータ。

「フェイトちゃん私達も」

「うんっ」

なのはとフェイトもシグナム達に加勢しようとしていた時、ディケイドはパラレルブッカーに反応があることに気付いていた。

「これはまさか・・・」

パラレルブッカーを手に取るディケイド。

と、パラレルブッカーから一枚のカードが飛び出しディケイドの手の中におさまった。

「新しいカード・・・」

じつとそのカードを見ているディケイド。

「土さん。そのカードって・・・」

そう聞くのは。

「こういうタイミングで出てくるのは確実に力になる。行くぜ!」

ディケイドはディケイドライバーにそのカードをセットした。

【アタックライド・テレパシー】

その音声と共に、ディケイドに新たな力が与えられた。

「ありきたりな感じだが・・・はやては俺が連れ戻す」

そう言う気持ちで落ち着かせるディケイド。

「まだ行けそうか？」

隣で倒れていたクロノにそう話しかけたザフィーラ。

「まだ負けるわけにはいかない。僕にもまだ切り札は残されているからね」

そう告げるクロノ。

『はやて・・・俺はシグナム達と違って本の少し前に家族になっただけの異世界人だ。だがな・・・』

新カードの力で、はやてに言葉を伝えていくディケイド。

『本当の家族みたいで楽しかった。お前を待っているのは俺だけじゃない・・・シグナム達も・・・なのは達もお前が戻るのを待っている』

「土さんの強い思いが私にも伝わってきてます・・・これならはやてちゃんにも・・・」

そう感じていたシャマル。

「お前なら何かやると思っていたが・・・所詮は雑魚だったか・・・そのままそこで・・・・・・・・くはっ!？」

ディケイドに攻撃しようとしたガイアは、飛んできた二つの攻撃を受けて怯んだ。

「まだ私達も戦える」

そう言うフェイト。

「全力全開で行きます!」

気合いを入れてレイジングハートを構えるのは。

「出来る限りのことはした。あとは俺達でお前を止めるだけだ、ガイア!」

そう言い放ったディケイド。

そんな中ガイアに取り込まれたはやては、ガイアの精神世界の中で自分自身の意識を取り戻しかけていたのであった。

第10話：はやての覚醒

『今の声・・・誰なんやるか・・・』

遠くから聞こえてきた声。

それは、エネルギーの塊となっていたはやてにとっては、ぼんやり状態で聞いていたようにしか伝わっていなかった。

しかし、ディケイドの行動は別の所でその効力を発揮していた。

『主はやて・・・』

「っ・・・今度は・・・近くで・・・」

『思い出してください・・・自分の姿を・・・今のこの場は精神世界・・・主の潜在魔力ならば可能です』

そう告げる声の主。

「自分を・・・」

と、ガイアの世界の中で、エネルギーの塊となっていたはやてはその姿を人型に戻すことに成功していた。

そしてゆっくりと瞳を開くはやて。

「ここは・・・」

辺りを見渡したはやて。

「凄く嫌な感じの場所や・・・冷たくて・・・心が消えていくような・・・」

と、次第にはやての瞳から光が失われていこうとした時、別のエネルギー体がはやての前に現れた。

「心を自身の中に・・・」

「この声さっきの・・・」

その声に自分の意識を戻したはやて。

「今まで貴方と接触できず・・・貴方に何も伝えられず申し訳ありません」

「な、なんや・・・そんな丁寧に話されてもやな・・・」

少し慌てているはやて。

「って、ウチの事ずっと見てたんか・・・」

「はい、私達の主を・・・」

「名前なんていうんや・・・まだ話理解できてないんやけど・・・シグナム達の知り合いなんか？」

そう聞いたはやて。

「私に名前は・・・私は闇の書のプログラムの一部に過ぎません・・・名乗るなら闇の書、でしょうか」

そう告げる声の主。

「こんな良い声で話す人が闇の書っていう名前やったら可哀想やな・・・」

と、何やら考え始めたはやて。

「主はやて・・・私には・・・」

「そんなのあかん。シグナム達かて立派な名前持つてるやろ。ウチもはやてっていう名前がある。友達になれたすずかちゃんにも・・・せやからウチが・・・ウチが主って言っならウチが名前つけてあげなあかんやろ」

そつとそのエネルギーの塊を抱き寄せるはやて。

「主・・・はやて・・・」

「今、ウチらは同じ世界の中におるやろ？ウチの考えた名前どないやろか・・・伝わるんかな」

ちよつと恥ずかしそうにそう言うはやて。

「・・・こんな私に素敵な名前を・・・ありがとうございます・・・主はやて」

と、エネルギーの塊だったのがはやて同様に人の姿に変わっていつ

た。

「やっぱりええ子やったんやな・・・」

「全ては主はやて・・・そして、私達を繋げてくれた土さんの声」

「土さん？そう言えば、その前に聞こえてたような・・・」

思い出してみるはやて。

とそんな時、この精神世界の空間が歪み始めてきたのだった。

「これは・・・」

「土さんの声によつて私が・・・そして主も自身の意識を取り戻しました・・・それによりあの者の力が不安定に・・・しかしこれでは私の本体・・・闇の書の力までも・・・」

「ほな、行こか！」

元気よくそう言ったはやて。

「集中させてたら聞こえてきたんや・・・みんなの頑張りの声・・・せやからウチがのんびりしちゃいられへんやろ。力・・・貸してほしいんや」

そう言つて手を差し出したはやて。

「・・・はい、喜んで・・・主、はやて」

「一緒に頑張るな・・・リインフォース」

微笑みながらその名を呼ぶはやて。

そして、はやてとリインフォース・・・二人の手が触れ合った瞬間、辺りに光が溢れていった。

その光はこの空間の、冷たい空気も暗い闇も全て吹き飛ばしていた。

そして、こちらは外世界での戦い。

「お前の戦い方・・・様々な力を自在に操るのは見事だったが、どれも私の力を越える事はかなわなかったな」

そう告げるガイア。

だが、その時

『今、みんなの所へ・・・』

そんな声がディケイドの意識の中に届いていた。

「その声・・・はやてか！」

「はやて・・・おい士・・・はやてがどうしたんだ」

そう言うヴィータ。

その直後ガイアの身体から大量の光が溢れ出してきた。

「なっ、この力はなんだ・・・」

驚いているガイア。

そして、ガイアの中から光の塊が飛び出すとディケイド達の前に降り立った。

そして光の中から姿を見せたはやてを見て、みんな驚いていた。

「主はやて！」

駆け寄るシグナムとヴィータ。

「あの姿・・・君達のマスターは闇の書の正しき力を引き継いだのか」

「さすがだな、我らが主は・・・」

そう言うザフィーラ。

「みんな心配かけてもうたな・・・それに土さんも」

「俺の事は気にするな・・・」

そう言ったディケイド。

「それと、改めて初めましてかな・・・すずかちゃんから聞いた・・・なのはちゃんにフェイトちゃんやな・・・」

そう告げるはやて。

「えっと、はやてちゃんだよね・・・」

「でも、その姿ってデバイスを・・・」

三人がそんな話をしていると、

「フェイト！あいつの様子がおかしい」

アルフの言葉にハツとするフェイト。

「この感じる力・・・これは」

ユーノ、そしてその魔力を同じように感じているシャルは真剣な表情をしていた。

ディケイド達が見ている中、ガイアはその姿を次第に変化させていたのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1806i/>

仮面ライダーディケイド・ミラクル

2010年10月9日01時01分発行